

2022

ライブラリー

目 次

私のおすすめ本	今野 広紀	3
私のおすすめ本	飯星 博邦	6
私のおすすめ本	遠藤 業鏡	8
人生最高のサブスクリプション	高橋 哲也	11
おすすめするようではない本	多鹿 智哉	13
私のおすすめ本	日比野 浩典	15
私のおすすめ本	山口 健二	18
図書館と私	平河 茉莉絵	21
読書の効能	手塚 広一郎	23
私のおすすめの本	呉 逸 良	25
経済学は役立つ！吉永實先生の思い出	脇本 利紀	28
令和4年度図書館の入館について（第1版）		30
令和4年度図書館の入館について（第2版）		31

私のおすすめ本

今野広紀 教授
(社会保障論)

『日本の医療と介護』池上直己著

日本経済新聞出版社 2017年

本書は、日本の社会保障制度のうち、医療と介護を学ぶ上で欠かせない書籍である。この主題に関心のある学生の多くは、現行制度について調べ、その課題に着目すると思われるが、現在の制度の構築には政治的背景や文化的背景が強く影響している。これらを歴史的に振り返る視点が含まれている関連書籍は稀有である。そして、現行の制度に関する解説と課題の提示がなされており、卒業研究に用いる際には非常に有用であろう。

著者は医師であり、慶応義塾大学医学部の病院管理学の教授（現名誉教授）を務めた著名な研究者である。海外の医療事情、特にイギリスのそれに精通しており、医療と介護に対して慧眼を有する人物である。池上先生の調査研究には、私自身も参加させて頂いた経験があるが、事象を捉える眼力の精確性、研究姿勢の厳しき、海外の研究状況の把握に対する信頼性のいずれもこの分野では他の研究者を圧倒していると感じさせられた。

医療に係る内容は第1章から第6章、介護に係る内容は第7章から第8章、終末期ケアに係る内容は第9章から第10章に執筆されており、読者の関心に応じて選択的に学びを得ることができる。内容の流れとしては、第1章は「医師と病院の成り立ちと直面する課題」、第2章は「医療保険制度の成り立ちと直面する課題」、第3章は「診療報酬の仕組み：全体の概要」、第4章は「診療報酬の仕組み：包括評価」、第5章は「診療報酬の仕組み：医薬品と医療材料」、第6章は「医療計画の歴史と課題」、第7章は「介護の歴史と介護保険の制度設計」、第8章は「介護保険の課題とその対応」、第9章は「終末期ケアの特性と課題」、第10章は「終末期ケアに対する現場の対応」、第11章は「残された課題と改革私案」という章構成となっている。この主題に関心のある学生には、ぜひ一読をお薦めする。

『長期療養ケアに対する質の規制』 ヴィンセント・ムア[ほか]著

現代図書 2018年

本書は、医療と介護を含む長期療養ケア（Long-term care）に対する各国の質の規制のあり方について国際比較を行う内容である。表題の長期療養ケア（Long-term care）とは、日本語訳では介護ケアとされることが多いが、欧米ではケアの概念が日本のそれよりもはるかに広いため、訳者は敢えて長期療養ケアとしたとされる。国際比較研究の対象となっているのは、オーストリア、ドイツ、スイス、日本、オーストラリア、イングランド、オランダ、スペイン、フィンランド、アメリカ合衆国、カナダ、ニュージーランド、韓国、中国の14か国である。

規制の手法に着目して国際比較を行うと、オーストリア、ドイツ、日本、スイスの4か国の手法は、長期療養ケア従事者に対する教育・研修の基準とケア従事者の認可要件を規定し、それが規制の枠組みを支えている。この視点に立つと、これら4か国の政府は、専門職団体やケア事業者団体に対して基準の遵守に関する責任を委譲していることになる。この手法はオーストラリア、イングランド、オランダ、スペインで行われる実証的な監査に基づく手法とは全く異なるものである。こちらの4か国では、政府当局が法律で規定される規制に対するケア事業者の遵守状況の監視を重視する傾向が強い。他方で、カナダ、フィンランド、ニュージーランド、アメリカ合衆国の4か国ではデータによる集中的な質の測定と結果を公表する手法となっている。制度構築の歴史が浅い韓国と中国は発展途上の規制手法であると分類されている。

本書は14か国を事例としているために大著であるが、関心のある国を中心に読んだ後、全体の内容が整理された第16章「長期療養ケアの質に対する規制：我々は何を学んだのか？」を読むと当該国の規制のあり方の立ち位置のようなものが分かってくるものと思われる。この主題に関心のある学生には、ぜひ一読をお薦めする。

『明治維新という過ち』 原田伊織著

講談社文庫 2017年

私たちは、中学校、高等学校での日本の歴史教育において、明治時代を、日本の近代化が大きく進められた転換期であったと教えられてきた。しかし、本書はそうした歴史教育が、

それ以前の江戸時代を強く否定する薩長官軍の歴史教育に基づく教えであったことを伝える名著である。

日本では、1603年に江戸時代が成立してから266年にわたって平和な時代が継続したが、幕末から明治時代にかけては内乱が起こり、昭和時代の初期には二度の大戦を経験した。しかし、これらは歴史の物差し^{メジャー}でみればすべて継続性の中での変化であり、時代区分で文化や国民の意識が急変したわけではない。そして、日本史の教科書で学んだ史実は、書き換えられた史実や真の史実が省かれた史実であることを本書は教えている。

本書では、江戸時代の史実や、御一新^{ごいつしん}、いわゆる明治維新への転換期に発生した数々のテロ事件とそこに關わる多くの藩や士族の争いや苦悩が鮮やかに描かれている。筆者の基本的な主張は、江戸時代に醸成された文化や生活習慣などの多くが、薩長官軍の下劣な手法（テロリズム）によって破壊され、欧化主義に突き進んだために他国への侵略を躊躇しない国となったというものである。

その主張を受け入れるかどうかは読者次第であるが、私たちが知らなかった史実を知る学びは大きい。日本大学の学祖、山田顕義は長州の出身で吉田松陰に師事したと伝わるが、吉田松陰とはどういう人物であったか、本書では紹介されている。本書での評価は強く否定的であるが、彼が残した言葉には学びがある。「志を立ててもって万事の源となす」。当時の政情に鑑みれば、その志が何であり、いま、それをどう評価すべきかは歴史学者に任せればよい。大切なことは、その言葉は現代においても通ずるという学びを得ることである。自分の学んできた日本史を振り返ってみたい学生には、ぜひ一読をお薦めする。

筆者自己紹介

今野 広紀（この ひろき）

1972年東京都生まれ。2001年一橋大学大学院経済学研究科修士課程修了、2008年一橋大学大学院博士後期課程単位取得満期退学。2004年医療経済研究機構、2007年国際医療福祉大学医療福祉学部、2016年日本大学スポーツ科学部、2022年日本大学経済学部に着任。

私のおすすめ本

飯星博邦 教授

(統計学)

『「家族の幸せ」の経済学：データ分析でわかった結婚、出産、子育ての真実』

山口慎太郎著

光文社 2019年

私が経済学部で勉強していた30年以上前には、経済学が会社の仕事には役立っても「家族の幸せ」とは何ら関係ないと思っていた。しかし、それから長い時間が流れて個人のビッグデータが蓄積されて、人間の私的な生活の営みさえも、コンピュータの力を借りて経済学と統計学でいろいろなことが分かってきた。たとえば、「赤ちゃんの出生体重は、その後の人生と大きく関わっている。赤ちゃんの出生体重が重いと、大人になってからも健康であることが多いだけでなく、知能指数や所得も高くなる傾向がある。」え?! そうなの。しかし、今ではアメリカの計量経済学の教科書にも掲載されている有名な話です。また、別な章によれば、今やカップルの2割がマッチングサイトで出会っていて、さらには、年収が1000万円と自己申告する人の数は実際の人数の4倍にもあがるそうです。本当に、これ全部、経済学者の研究成果なの!? と耳を疑いたくなる話ですが、本当の話です。経済学は大きく変わったのです。ネットにある文書のデータやGPSの地図情報まで、入手可能なデータはすべて使って、人間の行動を私的、公的の如何を問わず、データから何がわかるのか、地道に研究する科学が「新しい経済学」なのです。仕事に関係しない「家族の幸せ」についてのデータからの発見を、「数式なし!」で教えてくれる一冊です。この本の最後の章は「離婚の経済学」、人生の苦い部分も経済学者にとっては、おいしい研究対象なのです。人生の教訓は、全部、データが教えてくれます。

『使える! 経済学: データ駆動社会で始まった大改革』 日本経済研究センター編

日本経済新聞社 2022年

次の一冊は、タイトルにあるように「使える! 経済学」です。経済学は家庭生活だけでなく仕事にも有用になったのです。私が22歳でサラリーマン生活を始めた時(同じく30年前

の話)、その会社の人事課長は経済学部出身だったらしく、入社式の日、「経済学は役立たない。」とおっしゃっていました。「はあ、そうゆうものか」と暗澹たる気持ちで社会人生活が始まった。この本のタイトルは全く正反対、経済学をポジティブにとらえています。21世紀、「令和」の時代は「昭和」とは違うのです。データがあるところ、たちどころに難問奇問を解いてしまう。たとえば、フリマのマッチングやネットでのマーケティング、新商品の需要想定など。この本は8章ありますが、各章に日本人の世界的若手経済学者がわかりやすく、「データ駆動型社会」に対してどのように経済学を使うか説明してくれています。その1章に、ネットやマスメディアで一世を風靡しているイエール大学助教授の成田悠輔さんも寄稿しています。内容は「DX」と書いて「**デジタル・トランスフォーメーション**」から「**データ・トランスフォーメーション**」への移行だそうです。

『物価とは何か』 渡辺努著

講談社 2022年

最後の一冊は、インフレ問題です。これも専門書としては異例のヒットだそうで、皆さんやはり物価上昇には、かなり悩んでおられるのですね。この本の内容もビッグデータを使った分析内容を紹介しています。そもそも、ビッグデータの皮切りは、コンビニのレジで入力されたPOSデータが端緒らしい。POSデータというのは、レジの人が、売れた商品の情報と一緒に購入したお客さんの性別、見た目の年齢、購入した時間帯を入れた情報のことで、この情報を使ったコンビニ・チェーンが情報戦を勝ち抜いて全国展開していきました。私の子供のころにはコンビニはまだなかった。このような全国のどこで、どの商品がいくらで売られているという細かなPOS情報があるから、今のインフレの状況が正確にわかる。これを「ナウキャスト」いう。著者の渡辺努先生は、日本銀行出身で今は東京大学経済学部の学部長をされています。また、株式会社のナウキャストの役員でもあります。POSデータから、「東大指数」という物価を測る指数も開発されたそうです。商売上手。

筆者自己紹介

飯星 博邦 (いいぼし ひろくに)

1964年東京都生まれ。87年早稲田大学政治経済学部卒、東京電力(株)勤務後、2003年大阪大学博士後期課程中退。博士(経済学)。22年日本大学経済学部着任。

私のおすすめ本

遠藤業鏡 教授

(日本経済論)

『平成史：昨日の世界のすべて』 與那覇潤著

文藝春秋 2021年

大学教員のように「専門家」と呼ばれる人は他分野に越境したがる。専門外の事柄について発言しないのは誠実さの表れとむしろ肯定的に評価される。そのため、政治学者は政治しか語らず、経済学者は経済しか語らず、歴史学者は歴史しか語らないという現象が生じる。現実社会は、政治、経済、文化が相互に影響を及ぼしあっているにもかかわらず……。著者は2007年から2015年まで地方公立大学准教授（専攻は日本近現代史）として教鞭をとった後、うつによる休職を経て2017年に離職した経歴を持つ。歴史学者として著す最後の書物と位置付けた本書は、「専門家」にはびこる縄張り意識を取っ払って平成時代を振り返っている。引用文献は政治経済の歯ごたえのある専門書から『週刊女性』まで多岐に及ぶが、その奥行きが時代の空気をうまく伝えている。

論理展開、先行研究に対する「上品」な批判、引用の付け方など、本書は論文・レポートを書く際の良いお手本にもなっている。平成通史に興味がない学生であっても、斜め読みして知らない単語をピックアップしていけば語彙力が高まるだろう。このように言うと形式美だけを強調したものになってしまうが、著者は日本経済についても鋭い洞察力を発揮している。例えば、小泉政権が行った「りそな銀行の一時国有化」を次のように評している。『新自由主義』であれば本来なら破綻（倒産）させ、あとは市場の判断に委ねるべきところを、むしろ銀行業界全体を威圧して国策の支配下に置く道を選んだ（222頁）という意味で「白色革命」だったと。小泉政権イコール構造改革と評価するのは褒めすぎで、一部の政策は「権力闘争」だったという解釈である。あと数年もすれば、小泉純一郎どころか東日本大震災すら知らない若い世代が大学に入って来る。平成時代に手触り感を持たない若い世代にとって、本書は過去を知る格好の教材となるはずである。

『国際人権入門：現場から考える』 申恵丰著

岩波書店 2020年

「日本で国際人権問題など起きるはずがない」というのが多くの日本人の直観ではないだろうか。本書は、日本で暮らしている日本人も国際人権問題の被害者となっている事実を突きつけ、「美しい国、日本」の神話を次々と解体していく。「日本が批准している人権条約の一つである社会権規約は、国に対して、無償教育の漸進的な導入によって、能力に応じすべての人に平等に高等教育の機会が与えられるようにすること、適切な奨学金制度を設立することを義務づけている」(iv 頁：強調遠藤)。かつて存在した日本育英会は、奨学金貸与を受けた者が教員などとして一定期間勤務した場合に返還を免除する制度を有していた。しかし、教育職就職者への返還免除制度は1998年に廃止され、小泉政権の特殊法人改革で育英会が2004年に廃止されると研究職就職者への返還免除制度も廃止された。こうした一連の政策は、社会権規約の趣旨に反する後退的措置であったと著者は厳しく批判する。労働者福祉中央協議会が2019年に公表したアンケート調査によると、日本学生支援機構の奨学金利用者は39歳以下では46.9%と推定され、彼らが抱える奨学金ローンは平均で324.3万円にも及ぶ。奨学金返済が重荷になって結婚や出産に踏み切れずにいる日本人は、国際人権問題の被害者だという告発である。

足を踏まれたことがある人間は、自分が他人の足を踏んだ時に相手の気持ちを想像することができる。しかし、踏まれた数や踏まれ方が尋常でない場合、他者への感応力は吹き飛び、「痛い」と叫ぶ行為すら無駄だと思ってしまう。本書は、足を踏まれることに慣れて逆境を宿命視している人々に国際人権の存在を知らせ、政治参画の必要性を訴える本だと理解した。奨学金ローンを抱えている若い世代—上述の通り39歳以下の約半数—が政治的諦観主義（「投票しても何も変わらない」という意識）を捨て去れば、逆境の固定化を防げるはずである。トマス・ジェファソンは次のような言葉を残している。「勇気を持った一人の人間は、多数派である」と。「親ガチャ」を呪うだけでは多数派にはなれない。

『昔、言葉は思想であった：語源からみた現代』 西部邁著

時事通信出版局 2009年

本書は、語源から遠ざかった意味づけで使用されている数々の言葉を拾い出し、それら

の蘇生を目指した書である。経済学と縁のある言葉では、パブリック・セクターの記述が示唆に富んでいる。この言葉は「政府部門」と訳されることがあるが、それは間違いで「公衆部門」と訳すべきであると著者は主張する。「パブリック（公共）の部門をすべて政府が担当するというのは、逆にいうとパブリック（公衆）がパブリック・マインド（公心、public mind）を持っていない（もしくは公心の発揚をすべて政府に委託する）ということ」（10頁）を含意する。政府のみをパブリック・セクターと呼んで平然としている現代人（^{えせ}似非公衆）は、「公」を担う「民」の存在を不可視化するため、剥き出しの利潤追求を正当化しているようなものだという批判である。歴史学者のポーリン・メイアーによると、米国における私企業（private corporations）は企業の資産が民間資源に由来することだけを意味したため、19世紀前半までは私企業であっても公共善（public good）に配慮しなければならなかった。「私企業なのだからステークホルダーに配慮する必要はない」という「そもそも論」は、米国においても偽史的な叙述になるわけである。

「公」と「民」の不可分性と関連して、^{よろん}輿論（public opinion）の記述も見逃せない。著者は、熟慮と経験を経て定着した集団的な合意を輿論と呼び、多数派の臆説といった意味合いしか持たない^{せろん}世論と使い分けている。端的に言うと、パブリック・マインドが多いものが輿論であり、それが少ないものが世論である。「公衆部門」と呼ぶべきパブリック・セクターを「政府部門」と誤訳して平然としている現代人への批判は、輿論の衰微と世論の蔓延に対する警鐘でもあったわけである。本書が出版されたのは2009年だが、「世論と書いてヨロンと読む」言語環境が続く現在でもその価値を失っていない。ただしこの点については、著者の先見の明を褒めるより、我々の知的怠慢を恥じるべきだろう。

筆者自己紹介

遠藤 業鏡（えんどう かづみ）

1973年生まれ。日本開発銀行（現・株日本政策投資銀行）入行後、中曽根平和研究所主任研究員、広島大学客員准教授などを経て現職。著書に『CSR活動の経済分析：持続可能な社会に必要な理論と実証』（中央経済社、2020年）がある。

人生最高のサブスクリプション

高橋哲也 准教授

(人的資源管理論)

大学における「レポート」とは教員から課されたテーマについての報告書のことである。レポートとは何かについて詳しくは1年生のゼミの講義内で聞いてもらいたい、簡単に言えば上記の通りである。報告書であるからには、感想文とは異なる。報告書作成のためには、情報を収集し、その事実に基づき文書を作成することが求められる。この際に重要となるのが、そうした情報をどこで収集し、さらに事実に基づく情報とは何かという点である。事実に基づく情報は「エビデンス」と呼ばれることもある。エビデンスの無い文書を提出しても、それは評価の対象外となることが想像される。エビデンスはどこで獲得できるのか考えてみよう。

講義にてレポート課題を出された学生は、まず始めにネットで検索をされると思われる。Googleで検索しWikipediaに行き当たり、そこに記載のある文言を転記する学生もいるかもしれない。このあたりの情報で満足するようでは、「メディアリテラシー」が低いと言われてしまう上に、レポートでは「剽窃」となってしまう場合もある。文字の読み書きが出来る技能をリテラシーと言うとすれば、メディアリテラシーとはネット上の情報を正しく使える技能と言える。近年は書籍や論文の電子化も進んでおり、書籍もオンラインで閲覧可能となっている点から、Googleの検索結果のみならず書籍もメディアに含めて考えよう。メディアとは媒介物を意味しており、その点では書籍もメディアであるのは当然のことでもある。エビデンスの獲得にはメディアリテラシーが必要となりそうである。

メディアリテラシーを考える上で問題は二点ある。ひとつにはネットで検索結果を正しい情報として鵜呑みにしてしまうこと、もうひとつはネットや書籍の情報を出典不明で使用してしまうことである。大学生活を生き抜くためにはこうした二つの問題に対処するためのスキルを身につけておく必要がある。まず内容の真偽についての危険性について注意すべきである。ネットでの検索結果の内容を検討せずに引用してはならない。次に剽窃の危険性がある。レポートに引用箇所の記載の無いコピー（copy and paste）をしてはならない。レポート課題においての剽窃は当該授業の単位認定がされないばかりか、履修した一年間の全単位が認定されない可能性もある。ネットの記事はクリック一つでコピーできるだけに、切羽詰まった学生は安易にその方法を選択し、適切な引用を記載せず使用して

しまう場合もあり得る。メディアリテラシーが身に付いていないとエビデンスの獲得はおろか、自らを窮地に追い込む可能性すらあるのだ。そうしたメディアリテラシーの修得とエビデンスの獲得のために大学図書館が大きな役割を果たす点について確認したい。

大学図書館には書籍しかないと思いがちであるが、様々な DVD などの映像資料のみならずオンラインデータベースも所蔵されている。データベースに記載されている情報は Google で検索しても入手できない情報ばかりであり、レポート作成への貴重な情報源となっている。ネット社会が急速に進展する中で情報が過多になりつつあり、日頃目にする情報にばかり関心が向く傾向も強い。大学図書館には 100 年以上にわたって蓄積された書籍があるのはもちろんであるが、データベースのようなネットには無い情報が図書館にはある。また図書館の情報は自宅からオンラインで閲覧できるようになりつつあり、自宅から資料を閲覧できるようになる傾向は強まっている。レポートで資料が見つからないというのは、もしかすると見つける方法を知らないだけかもしれない。その際には図書館には司書という専門職の方が常駐しているので相談するといい。図書館にある書籍やデータベースなどを使用して作成したレポートは単なる感想文とは異なり、エビデンスに基づいた事実について説明した文書となっていることであろう。SNS に代表されるネット情報と図書館に所蔵されている情報を比べて、大学生としてのメディアリテラシーを身につけて社会に出て行くことが大卒としての矜持を保つための分岐点かもしれない。

人生における大学図書館との繋がりについて説明して終わりたい。大学図書館は「サブスクリプション」である。いわゆるサブスクであり、こう書くと何やら怪しげに聞こえるかもしれないが、意味合いとしては「定額使い放題」ということだ。在学中はもちろんのこと、本学の卒業生であれば生涯に渡り使用することが可能である。社会人になってから学び直しの必要性を感じた場合などでも利用が可能である。ふと立ち止まって勉強したいなと思った際には大学生の頃のレポートを思い出しながら、もう一度図書館で学ぶことで開ける未来がある。大学図書館とはそういった意味で人生最高のサブスクリプションだと断言できる。

筆者自己紹介

高橋 哲也（たかはし てつや）

本学で人的資源管理論を担当しています。授業では働く際の諸問題について講義しています。図書館には関連書籍も沢山ありますので、ぜひ活用してください。

おすすめするようではない本

多鹿智哉 准教授
(経済数学)

『詭弁論理学』野崎 昭弘著

中央公論新社 1976年

おそらく学生のみなさまに向けた文章ということで、大学生当時の筆者自身が読んでいた書籍の範囲でおすすめを書こうと思い立ちましたが、なにぶん当時は図書館で借りるか、青空文庫などでダウンロードした文章を電子辞書（当時スマホやタブレットはなかった一方、電子辞書は多機能であった）に入れて読むというスタイルでしたので、当時どんな書籍を読んでいたかほとんど記録にも記憶にもありません。本書は其中で確実に筆者が当時読んでいたという記憶があるものです。本書は様々な（詭弁）論法や論理・数学パズルについて知的に、軽妙に語る、長く読まれている名著です（2017年に改訂版も出版されています）。紹介されている数学パズルは今では有名なものも多く、多少古びてしまった本書ですが、現代の「ソフィスト」たちによる騙る弁論や詭弁・強弁が蔓延るこの時代で本書を読めばそれを知的に笑って楽しめるようになることでしょう。

『スピヴァック多変数の解析学—古典理論への現代的アプローチ』

M. スピヴァック著；斎藤 正彦訳
東京図書 2007年

大学院レベルの経済学を学ぶには解析学が必要だと思った筆者が図書館で読んでいたもの（のひとつ）が本書です。原著初版は1971年、薄くコンパクトにまとまっている名著です。扱っている内容はベクトル解析の初歩的な内容ですが当時の筆者にとっては非常に難易度の高いものでした。1日かけて2、3ページも進まず、それも行ったり来たりしながら行間を埋めたり練習問題を解いた思い出があります（数学書を読むときにはよくある）。翻訳も特徴的で、普通は「微分可能」や「連続微分可能」と訳すところを「可導」や「強可導」とマネしたくなるような（マネしてはいけない）カッコいい用語を割り当てています。現在は絶版で、今では同じ分野を学ぶのにずっと良い書籍もあると思いますが、そういった書籍に触れられるのも図書館の良いところですね。

『ペトロス伯父と「ゴールドバッハの予想」』A. ドキアデイス著：酒井 武志 訳

早川書房 2001年

こちらは数学者を扱った小説です。舞台はギリシャ、主人公が田舎に住む、実はかつては高名な数学者であり 300 年来の未解決問題・ゴールドバッハ予想に挑んでいたペトロス伯父さんの記憶をたどる物語です。応用数学を研究していたこともある著者による実在の数学者を交えたフィクションです。実在の数学者、クリストス・パパキリアコプーロス博士がモデルともいわれますが、実際に交流した人のエッセイなどを読む限りではおそらくパパキリアコプーロス博士はこんな人ではない。学者を扱った小説やフィクションは単なる奇人・変人伝になりがちですが、本書はそう言ったものでなく、まるで実在の人物の伝記のような物語になっています。筆者が読んだときにはこういう研究者にはなるまいと思ったものでした。

筆者自己紹介

多鹿 智哉 (たじか ともや)

2017年 博士 (経済学) 神戸大学

代表的な論文の日本語解説はこちら

(<https://sites.google.com/site/tomoyatajika90/jpn/ntsummary>)

私のおすすめ本

日比野浩典 准教授

(生産管理論)

『トヨタ生産方式：脱規模の経営をめざして』 大野耐一著

ダイヤモンド社 1978年

世界に誇る日本のものづくり企業のなかでも、売り上げ、利益が突出し、国際的に知名度が高い企業といえば、トヨタ自動車が筆頭に挙がるであろう。そのトヨタ自動車の根幹の一つは生産システム・生産管理である。トヨタ生産方式と名付けられ、海外では TPS (Toyota Production System) と呼ばれる。4万点と言われる自動車部品を必要な時に、必要なものを、必要な量を供給し、一糸乱れず自動車を製造するための生産方式である。トヨタ生産方式は、国内はもとより、米国ハーバード大学など著名大学でも長期的に動向研究が実施され続けられている。特に海外では、「made in Japan」の代表として TPS を捉え、多くのエンジニアがフィロソフィーや手法の導入方法を学習している。そのトヨタ生産方式の産みの親が元副社長の大野耐一氏であり、大野氏が執筆した最初の書籍が本書である。本書ではトヨタ生産方式の基礎である「ムダの徹底的な排除」のため、「JIT (Just In Time)」 「自動化」をはじめ、「カンバン方式」「平準化」「7つのムダ」「5回のなぜ」などの手法が分かり易く解説されている。トヨタ生産方式を初めてエンジン組立ラインに導入し、試行錯誤により有効性を確認した苦労話などは、大野氏しか語ることができない逸話であり興味深い。本書は生産管理を学ぶ学生や興味のある学生に、最初にお勧めする書籍である。

『新訳 科学的管理法：マネジメントの原点』 フレデリック W. テイラー著

ダイヤモンド社 2009年 (原著 1911年)

科学的管理法は、テイラーが創始した管理法で、経験や勘に基づいたこれまでの成行き管理に代わって、管理上の諸問題の解決に科学的アプローチしたもので、事実上アメリカ経営学の出発をなすものである。テイラーは、科学的管理法の集大成として、本書を 1911年に執筆した。後に、科学的管理法は、「科学的」に管理するための工学手法である IE(Industrial Engineering)として発展し、現在も、製造業やサービス業で活用されている。

本書は、100年以上前の書籍であるが、今なお、学ぶべき視点や気づきを与える内容となっている。テイラーは、今日では「科学的管理法の父 (the father of scientific management)」とよばれている。

テイラーは、特には時間研究(Time Study) の先駆者である。時間研究(Time Study) とは、作業またはその一部を遂行するために要した実際の時間を、適当な時間測定具を用いて測定し、得られた情報に基づいて作業の改善や標準時間の設定を行う手法の体系である。本書では、テイラーの研究として、製鋼所に職工として働いた時の体験が興味深い。「一日の公正な作業量」の必要を痛感し、初めてストップウォッチを工場の作業現場に持ち込み、「銑鉄運び作業」、「ショベル作業」の研究を行い、作業の標準化により一日の作業量を科学に最適化できることを示した。

また、本書では、テイラーと並んで科学的管理法の基礎を築いたギルブレスに関する記述がある。ギルブレスは、動作研究(Motion Study)の先駆者である。動作研究とは、作業者の行う全ての動作を調査、分析し、ムダな動作を除去し、必要な動作はさらに改良、改善し、より良い作業方法を求める手法の体系を示す。本書で取り上げられているレンガ積み作業は興味深い。レンガ積み作業を観察していると、不思議なことに、二人として同じやり方で作業をしていないことに気づいたギリブレスは、作業には唯一最善の方法(One Best Way)があるはずだと考えた。1時間 125 個積み上げていたレンガの数を、一躍 3 倍近い 350 個まで改善した逸話は、興味深い。本書は生産管理を学ぶ学生や興味のある学生に、強くお勧めする書籍である。

『ザ・ゴール：企業の究極の目的とは何か』 エリヤフ・ゴールドラット著

ダイヤモンド社 2001年 (原著 1984年)

赤字工場を舞台として、栄転した直後の新マネージャによる、新マネジメント手法導入により、短期的に工場を黒字化するサクセスストーリーの小説。1980年代に米国でベストセラーになったものの、日本語翻訳版は約20年後にやっと出版された。日本語翻訳版は、日本でもベストセラーになった。アニメーション版の小説も後に出版されている。作者は、ゴールドラット氏で、世界的に有名な生産管理手法の TOC (Theory of Constraints) の開発者である。TOCは、工場内の工程のボトルネックを発見し、ボトルネック工程を中心として生産管理を実施することで、生産量を示すスループットを増やし、過剰在庫を減らす

考え方である。本書では、TOCの基本的な考え方に基づき、赤字工場のボトルネック工程を特定し、TOCの手法を使用して、改善していくストーリー展開になっている。小説を読みながらTOCを理解できる構成になっている。英文原著が発行された1980年代は日本がバブル経済に沸き、世界を席卷していたときであり、作者のゴールドラット氏は、本書により日本のものづくり企業がTOCの効果に気づき、導入することで、より一層国際的に優位になる可能性を憂慮し、日本語への翻訳を20年近く止めていたと語っている。このことは、当時の日本のものづくり企業の世界での高い評価・競争力を知るエピソードの一つとして語られている。本書は、小説として登場人物やストーリーの展開が良く練られており、小説としても面白い。本書は生産管理を学ぶ学生や興味のある学生に、強くお勧めする書籍である。

筆者自己紹介

日比野 浩典（ひびの ひろのり）

専門は生産システム。トヨタグループでの自動車の研究開発、経済産業省外郭団体研究所および東京理科大学での生産システムのシミュレーション研究開発を実施。2019年スイス連邦工科大学客員教授。日本機械学会フェロー。趣味はテニス。

私のおすすめ本

山口健二 専任講師
(ICTリテラシー)

『いちばんやさしい AI (人工知能) 超入門』大西可奈子著

マイナビ出版 2018年

この本は、AI (人工知能) について、数式や専門用語を用いずに解説をした本です。AI の定義は書籍によって様々ですが、この書籍では、「教えた以上のことができる」、すなわち、「自分で考えて判断ができる」コンピューターという説明から始まっています。そして、AI が得意なこと・苦手なこと、AI の歴史、AI で用いられている技術である機械学習やディープラーニングについて、図や表、イラストを用いてとても分かりやすく説明されています。特に、機械学習については、選んだパンの組み合わせからお勧めの飲み物を考える問題を題材として説明されており、初学者の初めの 1 冊として導入しやすい内容となっています。

近年では、文章を書いたり、絵を描いたりする AI も登場し、AI に人間の仕事が奪われるのではないかと思っている人もいます。確かに、AI が得意なことに関しては、AI が担当することになると思いますが、AI がなんでもできるわけではありません。この本の後半では、「AI とシゴト」というタイトルで、いくつかの業種において AI がどのように用いられるのかが解説されています。業種により AI の使われ方は様々です。この本を読むことで、新しい AI の使い方を見つけることができるかもしれません。

AI (人工知能) について知りたいけど、難しくて最後まで読み切れるか不安だったり、数式が出てくる本が苦手だったりする人にお勧めする一冊です。

『ウェブ進化論：本当の大変化はこれから始まる』梅田望夫著

筑摩書房 2006年

この本は 2006 年に発刊されました。すなわち、2005 年に設立された YouTube、2006 年に設立された Twitter、2010 年に設立された Instagram といった現在利用されているサービスがまだ大きくなる前または登場する前に書かれた本です。なので、そういったサービ

スが登場する前、インターネットではどのようなことが起きていたのか、そしてどのように進化していったのかを知るのに良い本であると言えます。

従来は一部の人しか利用することができなかったコンピューターやインターネットが、「チープ革命」によって、多くの人々が利用できるようになりました。それにより、どのような変化が起こるのかを、この本では説明しています。例えば、「増殖する地球上の歴大（ぼうだい）な情報をすべて整理し尽くす」という構想を持った Google の解説では、Google がこれまでどのようなことをしてきたか、どのようにして大きくなっていったのか、その一片を知ることができます。また、出版社と流通業者と書店の 3 つが関係した従来の本の流通モデルに対して、現在ネットショッピング業界を牽引する Amazon がどのように切り込んでいったか、「ロングテール」という言葉を軸に説明をしています。

後半では、将棋棋士の羽生善治が語った、IT とネットの進化により将棋が強くなるための高速道路が一気に敷かれたこと、そしてその先の大渋滞についての解説がされています。こちらにも興味深い内容で、現代においても同じことが言えると思います。

『統計学がわかる【回帰分析・因子分析編】』 向後千春， 富永敦子著

技術評論社 2009 年

この本は、『統計学がわかる ハンバーガーショップでむりなく学ぶ、やさしく楽しい統計学』の続編になりますが、この本から読み始めることもできます。大量かつ多様かつ多頻度で発生するデータのことをビッグデータと言いますが、近年、このビッグデータを分析する手法であるデータサイエンスの分野に注目が集まっています。データサイエンスによりデータから新しい知見を見つけることで、企業活動に役立てたりします。統計学は、このデータサイエンスを行う際に、必要となる知識・技術の一つです。統計学では、データの全体的な傾向を掴んだり、未来の数値や因果関係を推測したりすることができます。

この本では、データサイエンスの分野の中でも回帰分析・因子分析の基礎について、Excel を使いながら、知識・技術ともに学ぶことができます。実際にデータサイエンスを行う際に、ちょうど良いサンプルデータを探すのはなかなか難しいのですが、この本では、出版社のホームページから本で使われているデータをダウンロードすることができ、簡単にデータサイエンスを始めることができます。Excel を使った散布図や相関係数、偏相関係数、検定、単回帰分析、重回帰分析、因子分析の手法を知りたい人にお勧めします。

筆者自己紹介

山口 健二（やまぐち けんじ）

2022年4月に日本大学経済学部に着任しました。ICTリテラシー、データ処理論、プログラミング論を担当しています。プログラミングをはじめとするICT（情報通信技術）全般に興味があります。

図書館と私

平河茉璃絵 助教

(ミクロ経済学)

図書館を利用する目的は、勉強のため、雑誌や新聞の最新号を読むため、時間つぶしに寝るため……など、人それぞれである。私も図書館を利用するが、その目的は主に調べものをするためである。初めて自主的に図書館を利用したのは、小学生の頃だ。

小学生の頃、国語や算数といった 5 科目の授業の他に、「総合的な学習」というものがあった。「総合的な学習」とは私の母校の場合、先生があらかじめ「世界の国々」「食べ物」等の大まかなテーマを決め、生徒達はそれに沿って自分の興味があるテーマを設定した上で調べ学習を行い、その成果をまとめて発表する、という時間であった。当時、私の家にはパソコンが導入されていなかったため、調べものをするには近所の図書館へ行き、資料を集める必要があった。当時は今ほどパソコンが普及しておらず、パソコンがない家庭も珍しくなかった。そのため、先生から「来週は発表資料作りをするので、そのための資料を持ってきてください」と言われた日には大変である。決まって私と同じような境遇の子どもたちが図書館に殺到し、本の争奪戦が発生した。蔵書検索で目当ての本を見つけても大抵は「貸出中」と表示された。しかし、ここで諦めては授業中に手持無沙汰となり、じっと自分の手を見つめたり、そわそわと周りの作業を見ながら 45 分間を過ごすはめになってしまう。そのため、司書さんに「〇〇というテーマの本はないか」と尋ね、場合によっては閉架の本を借りて、何とか資料を手に入れて授業に臨むことが常であった。当時は毎度冷や冷やししながら資料探しをしていたが、今となっては良い思い出だし、この経験が今に生きていると思う。

大学生になる頃には自分のノートパソコンを持つようになり、情報収集には困らなくなった。しかし、それでも図書館を利用することが多かった。ただし、大学生以降は近所の図書館ではなく、大学図書館を主に利用した。

大学生になるとゼミや勉強会で輪読することが多くなった。輪読している教科書の自分の担当箇所で見えない部分があると、まずネットで調べてみる。しかし、自分がわからないと感じているところを明快に説明しているものはあまりない。あったとしても「この説明は違うのではないか？」と感じることも少なくなかった。このような時は、決まって大学図書館へ行き、何冊か関連書籍を調べた。そうすると、何だかあやふやだった部分が

解消し、しっかりとした理解に変わる。特に英語で書かれた教科書を輪読する際は、大学図書館のお世話になることが多かった。

大学図書館には専門分野に関連した膨大な蔵書がある。例えばミクロ経済学の教科書だけでも何冊も蔵書があるため、授業でわからないことがあったときやゼミで何か報告が必要なとき、関連書籍を何冊か読むことで理解が深まり、質の高いノートや報告資料を作成することができる。大学生が専門分野の学習や調査研究をすることに関して、大学図書館ほど適した施設はないだろう。

近頃はパソコンだけでなくスマートフォンやタブレット端末が普及し、誰もが簡単に情報へアクセスできるようになった。インターネットは手軽で便利だが、物事のより深い理解のためには本から情報を得ることも大事である。学生の皆さんも、授業で困ったときやゼミで報告が必要なときには、ぜひ図書館を利用されてはいかがだろうか。自分の手で膨大な蔵書の中からいくつか本を選び出し、それらに目を通すのは大変なことに感じられるかもしれないが、その体験は必ずや今後生きるはずである。

筆者紹介

平河 茉璃絵 (ヒラカワ マリエ)

千葉県生まれ。2022年より日本大学経済学部に着任しました。女性就労に関する分野に関心があり、これまでは保育と女性就労に関して研究を行ってきました。

読書の効能

手塚広一郎 教授

(産業組織論)

「大学生活で何をすればいいかわからない」という学生に対して、私は読書を推しています。読者には優れた効能があるためです。その1つは、ありがちな言い方ですが、想像力を高めることがあげられます。最近のVR（バーチャル・リアリティ）やメタバースなどのデジタルで生みだされた仮想空間は、“視覚”や“聴覚”だけでなく、場合によっては“触覚”などにまで訴えます。それに対して、読書は、アナログな仮想空間を生みだします。

漫画やイラスト本などのような視覚に訴えるものを除いて、一般的な本は、あくまで文字だけで世界が表現されます。そのために読解力や想像力が求められ、自分の頭の中でそれを楽しむための世界や空間を設ける必要があるのです。VRやメタバースのような作られた仮想空間を受け入れるのではなく、自分の頭の中でいろいろなシーンを思い浮かべながら、能動的に世界を構築するという意味で、読書は想像力を高めるためのとても優れた手段であると言えます。

さて、本を読むことのもう1つの効能として、ボキャブラリー（語彙力）が増える、ということがあります。英語を学ぶ時には、英単語を覚える必要があります。実際、海外で自分の伝えたいことを適切な単語が思いつかないために、もどかしい思いをした人もいるかもしれません。実は、日本語でも同じことが言えます。しばしば、タレントさんがいわゆる「食レポ」をする場面がありますが、その味を伝えるときに、どれだけボキャブラリーがあるか、言い換えれば、どれだけ「使える言葉」をもっているかが表現力の差として大きく表れます。

こうした表現力を高めるためには、読書はかなり有効です。小説やノンフィクションなど様々な分野の本をたくさん読み、それによって「使える言葉」の引き出しを増やすことは、文章を書くのに役立つだけでなく、日常会話でも会話の中でのコミュニケーションを深め、共感力を高めることになるでしょう。

ボキャブラリーなら、SNSでたくさんの文章を読んだり書いたりすることで蓄積している、と考える人もいるでしょう。もちろんSNSもコミュニケーションを深め、語彙力を高めるためのとても重要なツールです。スマホ等で得られる情報は、相対的に短い文章量で新しい情報を効果的に手にすることができます。それに対して、読書は時間をかけて長い

文章を読むものです。時間や手間がかかる分、得るものも多いといえます。

それでは、いったいどのような本を読めばいいのでしょうか。私個人としては様々な分野の本を読むのが肝要と考えています。普段あまり読書をしていないという人は、取り掛かりとして、何かキーワードを決めた上で、新書や文庫本などから読み始めても良いでしょう。例えば、上記の「メタバース」という言葉が気になったのであれば、岡嶋裕史著『メタバースとは何か：ネット上の「もう一つの世界」』（光文社新書）という本があります。様々な本を読む中で、自分に合うものもあれば、そうでないものもあります。いちど、自分にあった本を見つけたら、それを何度も読み返してみるのもよいでしょう。数多くの出版されている本のなかから自分にあった本に出会うのは、とても価値があることです。

本を探すということ言えば、最近では、電子書籍のサイトで自分の注文履歴に応じておすすめの本が出るようになりました。これは、これまでの自分の好みの傾向にあった本を見つけるには有用です。その一方で、私は図書館で本を探すことを強くお勧めします。オンラインではなく、図書館に直接出向いて、自分にあった本を直接探すこと、これは一見すると時間の浪費と思うかもしれませんが、とても重要な意味をもっているのです。本は図書館にいます。本が私たちに会いに来てくれることはありません。是非、この大学生活の間に、図書館に足を運び、良い本に出会ってください。

筆者自己紹介

手塚 広一郎（てづか こういちろう）

1971年名古屋市生まれ。1995年一橋大学商学部卒、1999年一橋大学大学院商学研究科単位取得の後、2005年一橋大学にて博士（商学）を取得。2002年から2012年まで福井大学教育地域科学部・准教授（助教授）、2012年4月より現職。

私のおすすめの本

呉逸良 教授

(ミクロ経済学)

『思考実験 科学が生まれるとき』 榛葉豊著

講談社 2022年

初めて「思考実験」という言葉を知ったのは、大学時代にアインシュタインの相対性理論を紹介する雑誌を読んだときでした。理論経済が好きな私にとって非常に馴染みのある思考法で、親しく感じました。

経済理論は現実の事実観察から、事情間の因果関係や法則的關係を反証可能な形で表現しなければなりません。しかし、それらの関係の多くは物理学のように実験によって見つけ出すことが困難な場合が多いです。そのため、理論構築する際に、複雑な経済現象から説明したい命題にとって重要な諸要素を抽出し、概念を明確化して、それらの関係が単純化・抽象化された図式ないしモデルの分析を通して導く、という方法がよく使われます。当然、そこで導かれた理論上の諸関係は、現実に観察された事実に基づく検証が不可欠です。経済学ではそれは計量経済学分野での重要な研究内容となっています。このような理論構築の方法は、理論物理学の思考実験と類似する部分があるが、「思考実験」という言葉はあまり使われず、「モデル分析」や「理論分析」などと言われています。

榛葉豊師の『思考実験 科学が生まれるとき』と出会ったのは、自宅近所の書店でした。今までは、「思考実験」という言葉だけを知るぐらいで、深く考えたことはありませんでした。思考実験を本にするのを想像することすらありませんでした。『思考実験科学が生まれるとき』という文字が目に入った瞬間、正直に言って多少驚きました。手に取って読んでみたら、すぐにその内容に吸い込まれ、早速購入しました。文庫本なので、どこでも携帯でき、何度も読みました。科学と思考実験との関係のみならず、科学の歴史や科学論に対する認識をより深めることができました。

本の第1章は、まず西欧近代科学が求める「普遍法則」の特徴やその方法論を紹介しています。特に19世紀のイギリスの科学哲学者ウィリアム・ヒューエル(William Whewell, 1794-1866)が提唱した「仮説演繹法」をより詳細に説明しています。この方法は次のように表現されます(本の22~23ページ)。

- ・観察事実にもとづき、仮説を立てる(帰納法)

・その仮説から生起する現象を予測する（演繹法）

・その予測が観察事実と一致するか比べる

① 一致 → 仮説は十分に考察の対象となりうる

② 不一致 → 仮説が反証（否定）される → 仮説を修正するか、別の仮説を立てる

このような方法は実に近代経済学にも既に採用されている方法です。経済学部の学生ならば、ミクロ経済学の授業で経済学の科学性について説明されるときに、きっとこの方法が紹介された覚えがあるでしょう。

科学的な方法論を紹介した上で、本の第2章は思考実験とはなんだろうかを説明し、思考実験の役割を指摘しました。そして第3章では多数の事例を列挙しながら、思考実験の進め方を紹介してあります。それらの事例は、物理学のアインシュタインのエレベーター思考実験やガリレオの物体落下の思考実験などのみならず、社会科学や哲学にも関係する「同一性問題」や「転送機問題」に関する思考実験をも多数含まれています。これらの思考実験の事例だけを読んでも、問題の面白さを感じることができ、絶好の思考訓練の題材にもなります。

第4章は思考実験の6つの分類を概説し、第5章以降は各分類について詳しく紹介してあります。中には、近代科学史上、当時の物理学界のトップ俊才たちの間で展開されていた思考実験を利用した数々の論争が紹介され、精彩絶倫なディベートに脱帽するしか言いようがありません（第5章）。また、イギリスの哲学者フィリッパ・ルース・フット (Philippa Ruth Foot, 1920–2010) が提示した有名な「トロッコ問題」は、今にも話題になっていて、文系の学生にとってきっと親しみを感じる問題でしょう（第7章）。そして経済学の学生にとって嬉しいのは、「期待効用最大化仮説」や「ゲーム理論」に関する思考実験をも紹介されていることです（第7章の最後）。他には社会的選択に関する「アローの不可能性定理」や確率と統計に関する「ギャンブラーの誤謬」にも言及しています（第8章）。ミクロ経済学や統計学や計量経済学などの初級教科書に書かれていない内容なので、問題の面白さのみならず本質の深さを理解するにも、一読する価値は十分あります。

最後の第9章は、我々が人生の岐路に立ったとき、意思決定に迷うときなど、日常生活の中のいろいろな場面で、思考実験を如何に利用するかを紹介してあります。一般の方々にとっても思考実験は実に身近な道具であると感じました。

静岡理工科大学の榛葉豊師は、実は10年ほど前にも「思考実験」について本を執筆し、もうすぐ仕上げる原稿が不運に火事に焼かれたというエピソードがありました。この本は

榛葉豊師が再度に挑戦し、思いを込めた力作であると思います。著者の長い教育経験により、専門知識がなくても読めるほど分かりやすく書かれている大衆向けの本なので、皆様に大いにお勧めしたいと思います。

筆者自己紹介

呉 逸良（ご いつりょう）

担当科目： ミクロ経済学

専門分野： 理論経済学，空間経済学

主な書籍：(共著)『産業集積と新しい国際分業』文眞堂，2007年

「円周空間における公共財の最適供給と分布」隅田和人他編『都市・地域・不動産の経済分析』（所収）慶應義塾大学出版会，2014年

(共著)『Rebirth of the Silk Road and a New Era for Eurasia』八千代出版，2015年

経済学は役立つ！吉永實先生の思い出

脇本利紀 教授

(租税法)

吉永實著「[所得分析と成長理論](#)」(中央経済社、昭和 41 年)

標題の書籍は、租税法を担当している私の研究室にある数少ない経済学のテキストの 1 冊です。少し前置きが長くなりますが、お許してください。

1980 年 4 月、法学部に進学した私は、法曹の世界に挑戦するほどの気概もなく、景気は必ずしも良くないので、とりあえず公務員試験の勉強を始めておこうかという程度の認識でした。

当時、公務員試験のための予備校はなく、問題集が市販されているぐらいで、公務員を目指す学生は大学の授業などで使用するテキストを用い独学で勉強をする時代でした。公務員試験の受験科目を調べてみると経済学のウェートが大きいことがわかり、1 年生の時に教養課程の「経済学」を履修するも「限界効用」のところで早々に挫折。経済学は難解との苦手意識を持ってしまいました。これは困ったと思っていたところ、同じく公務員を目指している友人の K 君が経済原論担当のすごい先生がいると教えてくれました。ところが私の所属していた学科では履修することができず、授業時間と教室番号を K 君から聞き、2 年生の時に聴講することにしたのが吉永實先生の「経済原論」の講義でした(ちなみに K 君も公務員試験に合格し、某県庁で活躍されました)。本書はこの講義の参考書として指定されていたものだと記憶しています。

さて、吉永先生は、当時、成蹊大学教授で、私の大学には非常勤講師として教えに来られていました。講義は 400 人ほどが収容できる階段教室で行われていて、毎回、かなりの学生が出席している人気のあるもので、私は聴講ということもあり最後列で授業を聞いていました。先生の授業は通期でミクロ・マクロの基礎を習得できるようきっちりとしたシラバスに基づき、毎回、①講義のポイントの紹介、②板書によりグラフを使った説明、③参考書を使った数式等による補足、④当該理論が実務でどのように使われているのかの説明、という体系的な構成で、かなりの集中力を要する、まったく無駄のない講義内容でした。また、法学部生なのでこの程度の理解で良いといった妥協は一切感じられないものでしたので、毎回、三色ボールペンと定規を駆使しながらひたすらノートを取っていました。このノートも今なお保管しており、消費者行動の理論から始まって、生産者行動の理論、市場均衡、国民所得分析、IS-LM 分析、流動性のわな、金融政策・財政政策の有効性、産業連関、開放体系、成長理論などのグラフや先生のコメントなどが乱雑な文字で記載されています。

講義での先生のお話で特に記憶に残っているのは、私たち法学部の学生が経済学を学ぶ

意義についてです。「君たちが会社に入ってもすぐに経済学を使うことはないでしょう。しかし10年くらいたって経営の企画に携わることになる、経済分析に関する記事などを正確に理解できることが必要になります。その時にはこの講義で学んだことを思い出してください。」といった話でした。私は卒業後、国税庁職員になりましたので法執行が中心で経済学とは縁遠い仕事でしたが、10数年後に大蔵省（当時）に出向を命じられ、2年間、世界経済の指標や論調などを整理し幹部にブリーフィングする担当となりました。法学部出身で、しかも留学経験のない私には青天の霹靂というべき人事異動でしたので、吉永先生の講義の際に書き取ったノートを参照しながら大急ぎで経済学の勉強をしました。しかしながら在任中を振り返っても「頼りない課長補佐」であったと思わざるを得ませんが、なんとかこの種の経済論議についていけたのは、経済学を理解するための「基礎的な文法」を学んでいたからだということに気がきました。吉永先生の講義は、私にとっては「経済理論の学び方を学ぶ講義」だったのかもしれませんが。同時に、私のように一社会人として身近な経済事象をそれなりに理解して評価するという意味においても有用であったと確信しています。

私は吉永先生の講義を聞いたというだけで、直接お話をしたこともありません。しかし私自身が教壇に立ち、吉永先生と同じ立場になってみて考えることは、学生の皆さんには10年後も通用するような汎用的な租税法の基礎知識を習得してほしいということです。主として経済学を学ぶ皆さんにとって法学系科目である租税法は法解釈や判例の理解が求められますので、総じてハードルは高いかもしれませんが、私生活においても実社会においても租税を避けて通ることはできません。条文の解釈や判例の読み方などは法律が改正されても通用する知識でありスキルですので、どのようにすれば効率的・効果的に学生の皆さんに伝えていくことができるか日々格闘しています。

お恥ずかしながら吉永先生の「所得分析と成長理論」の内容について私は今もって理解できているとは言い難いですが、この本と当時のノートを見るたびに大学2年生だった頃の自分自身を思い出します。そして、毎回、私自身の講義が終わるたびに、「今日の講義はあの日の吉永先生のように学生に感銘を与えることができたのだろうか」と反省しないことはありません。

筆者自己紹介

脇本 利紀（わきもと としき）

1984年から2020年まで国税庁等で勤務し、2020年9月より本学部で租税法を担当しています。国税庁等に在任中は様々な個別事案にも接する機会もあり、税についてはいろいろ考える機会が多かったと思います。皆さんには租税法の基礎をしっかりと習得していただき、将来、適正な申告・納税を行ってほしいと思います。

令和4年度 図書館の入館について（第1版）

令和4年4月1日

令和3年10月28日付け「令和3年度図書館の入館について（第2版）」を改正し、「令和4年度 図書館の入館について（第1版）」を策定いたしましたので、下記のとおり御利用いただきたく御協力の程、よろしくお願いたします。

記

- 1 図書館入館の際には、以下のことを遵守してください。
 - ① 入館者は日本大学経済学部及び大学院経済学研究科に在籍している学生及び教職員、日本大学他学部の学生・大学院生・教職員（通信教育部含む）及び経済学部卒業生・大学院経済学研究科修了生に限定いたします。（経済学部の方針、今後の社会情勢及び図書館の利用状況等により、随時、変更することがあります。その場合は、ホームページにてお知らせいたします。）
 - ② 日本大学経済学部ホームページに掲載の自宅待機・解除の基準について（令和2年6月8日公開）を準拠できない場合は、入館できません。
また、厚生労働省公式アプリ「新型コロナウイルス接触確認アプリ（COCOA）」のインストールをお願いいたします。
 - ③ マスクを必ず着用し、館内ではマスクを外さないでください。
※マスクの配布は行いません。各自で事前に御準備ください。
 - ④ 入館する際には、必ず手指消毒をしてください。
 - ⑤ 退館する際には、利用した席の消毒をしてください。
 - ⑥ 図書館内での会話はグループスタディールーム、地下1階ラーニングコモンズを除き、厳禁です。
 - ⑦ 他の利用者との距離（2m以上）を十分に保ってください。
 - ⑧ 着座位置記録システムにて着座位置をGoogle Formsに送信してください。
 - ⑨ 図書館内では図書館スタッフの指示に従ってください。
 - ⑩ 利用者については、その滞在時間等を記録いたします。
※上記のことが遵守できない利用者は、退館していただきます。
- 2 運用開始日
令和4年4月1日（金）
- 3 通常開館時間
平日 8：55～21：00
土曜日 8：55～16：55
※変更の場合は、図書館ホームページでお知らせします。
- 4 入館制限等について
入館者数及び利用時間の制限はありません。
※経済学部の方針、今後の社会情勢及び図書館の利用状況等により、随時、見直すことがあります。
 - ① 地下書庫所蔵資料の利用については、図書館カウンターに御相談ください。なお、緊急事態宣言が発令された場合は、ラーニングコモンズ(地下1階)及びグループスタディールームを利用できません。
 - ② 書架から取り出した資料は、書架に戻さずに返本台に置いてください。
 - ③ 入退館は1階のみになります。
 - ④ 貸出図書の返却目的のみで来館した利用者は、3号館入口(閉館時は3号館裏の通用口)の図書返却ポストを御利用ください。

以上

令和4年度 図書館の入館について（第2版）

令和4年9月29日

令和4年4月1日付け「令和4年度図書館の入館について（第1版）」を改正し、「令和4年度 図書館の入館について（第2版）」を策定いたしましたので、下記のとおり御利用いただきたく御協力のほどよろしくお願いいたします。

記

- 1 図書館入館の際には、以下のことを遵守してください。
 - ① 入館者は日本大学経済学部及び大学院経済学研究科に在籍している学生及び教職員、日本大学他学部の学生・大学院生・教職員（通信教育部含む）及び経済学部卒業生・大学院経済学研究科修了生に限定いたします。（千代田区民等、学外の方については、当面の間、入館はできません。）
 - ② 新型コロナウイルス感染症に係る学生・生徒等への対応について（学務部・学生部）を準拠できない場合は、入館できません。
 - ③ マスクを必ず着用し、館内ではマスクを外さないでください。
※マスクの配布は行いません。各自で事前に御準備ください。
 - ④ 入館する際には、必ず手指消毒をしてください。
 - ⑤ 退館する際には、利用した席の消毒をしてください。
 - ⑥ 図書館内での会話はグループスタディールーム、地下1階ラーニングコモンズを除き、厳禁です。
 - ⑦ 他の利用者との距離を十分に保ってください。
 - ⑧ 着座位置記録システムにて着座位置をGoogle Formsに送信してください。
 - ⑨ 図書館内では図書館スタッフの指示に従ってください。
 - ⑩ 利用者については、その滞在時間等を記録いたします。
※上記のことが遵守できない利用者は、退館していただきます。
- 2 運用開始日
令和4年10月1日（土）
- 3 通常開館時間
平日 8：55～21：00
土曜日 8：55～16：55
※変更の場合は、図書館ホームページでお知らせします。
- 4 入館制限等について
入館者数及び利用時間の制限はありません。
※経済学部の方針、今後の社会情勢及び図書館の利用状況等により、随時、見直すことがあります。
 - ① 地下書庫所蔵資料の利用については、図書館カウンターに御相談ください。なお、緊急事態宣言が発令された場合は、ラーニングコモンズ(地下1階)及びグループスタディールームを利用できません。
 - ② 書架から取り出した資料は、書架に戻さずに返本台に置いてください。

以 上

